



連載

ビブリア・トーク
—私のオススメ—

… 細野 繁 (NEC)

クリエイティブ・マインドセット 想像力・好奇心・勇気が目覚める驚異の思考法

トム・ケリー&デイヴィッド・ケリー 著, 千葉敏生 訳
日経 BP 社 (2014), 392p., 1,900 円 + 税, ISBN : 978-4-8222-5025-6



世の中の75%の人は「自分はクリエイティブ」
と思っていないという。その潜在的な能力を
解き放せば世界は変わるだろう。たくさんの試行錯
誤を繰り返すこと、謙虚に仲間のアイデアに耳を
傾けること、人々に深く共感すること、そして、自
分のことをクリエイティブと信じられること。本書
は、そんな想像力、好奇心、勇気が目覚める思考法
を示し、それを実践できるようマインドセットを持
つことの大切さに気づかせてくれる。

しかし、自分のことをクリエイティブと信じるに
は、相当の勇気と自信がいるだろう。著者の Tom
Kelley と David Kelley は、クリエイティブな力を伸
ばすための心がけは、クリエイティブになると決意
すること、旅行者のように考えること、「リラックス
した注意」を払うこと、エンド・ユーザに共感す
ること、現場に行って観察すること、問題の枠組み
を捉え直すこと、そして、心を許せる仲間のネット
ワークを築くことだという。一見、易しそうに見え
るが、どれ1つとっても、常に心がけて行動する
のは難しそうだ。ことさら問題の枠組みを捉え直す
のは、どうやったらいいのか、どう考えたら枠組
みを捉え直したことになるのか、よく分からない。

問題を捉え直す

普段の会社や家庭での生活では、環境整備が進
んで、大きな不便さや困りごとをあまり感じずにい
る。でもそれは、今あるモノの機能の限界やルール
の制約を上手にかわしているからだ。普段の何気な
い行動を1つ1つ観察し、その理由を見つめていく
と、新たな気づきを得られるという。普段の生活の
中で、食事の支度や片付けのとき、通勤の途中の乗

り換えのとき、会社で会議の議事録を書いていると
き、そもそもこの行動をしているのはなぜか?と考
えると、そんな事柄が見えてくる。本書を読み進めると、
たとえば、自動販売機から炭酸ジュースを取り出す
のに、毎回わざわざ膝を曲げ、腰を屈めているのは
なぜだろう?と問いかけてくる。そうか、重力で足下
の取り出し口まで缶を落とす方が、腰の高さまで持
ち上げるよりも、機械にとってラクだからだ。人間
が機械の都合に合わせていたことによく気付く。

著者は、問題の枠組みを捉え直すもっとも強力な
方法の1つは、問題に人間味を加えることだとい
う。加えて、直接見えている問題の解決策を練る
ことから離れ、焦点や視点を変えることがコツだ
という。分かりやすい事例が示されている。MRI ス
キャナで検診を受けようとする幼いお子さんたち
は、不安と恐怖で怯えるため、麻酔が必要だったと
いう。なんとかするには、まず MRI スキャナのブー
ン、ブーンという音を、どう小さくするかを考える
だろう。しかし、お子さん達が MRI をどう体験し、
利用するかを総合的に考えたこと、つまり「MRI ス
キャナのデザイン」から「幼い患者に安全に喜んで
MRI スキャンを受けてもらう方法」へ問題の枠組み
を捉え直したことで、まったく違う解決策を出した。
MRI スキャナ内部の複雑な技術には一切手を加え
ず、MRI スキャナの外側にカラフルなイラストを施
したというのだ。海賊船や宇宙船のデザインにして、
MRI スキャンを冒険の体験に変えてしまうのだ。装
置のブーンという騒音が大きくなる直前、「これか
ら宇宙船が超高速に入るぞ。よく聞いてごらん」と
声掛けすることで、不安感や恐怖感を感じさせずに、
むしろ期待感さえ感じさせられる。

なるほど。自分も問題の枠組みを捉え直し、何か気づきを得て、解決策を導きたいものだ。しかし、示唆や洞察を得ても、そこから素晴らしい解決策のアイデアを出すのは難しそうだ。

創造のセレンディピティ

著者らの経験から言えば、最良のアイデアは他者とのコラボレーションから生まれることが多いそうだ。著者がクリエイティブな力を伸ばすための心がけの1つに、心を許せる仲間のネットワークを築くことを挙げたのは、そのためのようだ。自分1人ですべての答えが分かるわけではない、と謙虚に認めて、他者のアイデアを土台にするのが良いという。チームを築き、適切な場所に集まり、アイデアにアイデアを重ね、ひらめきが訪れた瞬間を見逃さず、がっちりつかみ取るのだ。そして、プロトタイプを作り、建設的なフィードバックを行い、アイデアの実現性を高めていく。

本書を読み進めるうちに、以前、本田技術研究所の方に「ワイガヤ」文化について伺った話を思い出した。本書はデザイン思考（design thinking）の考え方や体系を示しているが、ワイガヤはデザイン思考という体系化がなされる前から行ってきた同様の取り組みだという。新しい技術や考え方を導入して自動車を設計する際、チームを組んでワイワイガヤガヤと議論するそうだ。何日間も旅館に合宿し、チャレンジする設計上の問題点について解決策が出るまでとことん議論するそうだ。革新を目指す熱血者、冷静に技術の実現性を判断する博士、議論の滞りや視点の切り替えを図るタヌキ、といった立ち位置のメンバがいること、旅館の部屋のようなリラックスした場で行うことが良いらしい。そして、ある期間内に解を出さなければいけないという制約を持つことがポイントのようだ。この時間制約は、当然仕事なので当事者にとって一番苦しうではあるけれど、ギリギリの状況に置かれてこそ創造のセレンディピティに巡り合えるのかもしれない。

まあ、実践しよう

ソフトウェアやICTシステムの新規開発を何年も行っていると、指定された要求仕様に沿うことのみで、気がつかないうちに、こうしたらもっと良くなるかも？と発想を膨らませたり試作してみたりといった、自由な思考や行動を失っていないだろうか。子供のころを振り返れば、家にある紙とハサミで何か作ったり、友達と新しい遊びを考えたり、創造性を発揮して楽しんでいたと思う。社会人になり、企業で働く毎日になっても、ふと立ち止まって、今開発しているソフトウェアやICTシステムをとにかく作ることが目的になっていないか、ユーザの本当の困りごとを解いているのか、解決するためにワクワクしながらアイデアを出し合い盛り込んでいるのか、視点と問題の枠組みを変えて、振り返ってみたい。

本書は、まったく新しい考え方を教えてくれたのではなく、私たちが多かれ少なかれ備えていたものだと思う。しかし、効率的に過ごす毎日の中で、いつしか置き忘れてしまうマインドなのだろう。日々何気なく行っている日々の行動1つ1つに疑問を持ってみるようにしたい。幸いにも、最近、アイデアソンやハッカソンなどの企画が増え、新しいことを考えてみる機会、試してみる場に恵まれてきた。実践の場では、「言うは易く行うは難し」で、表面的な課題を手近な方法で解決する行動になりがちとも聞く。そんな模索が続くのなら、本書を座右に置き、今のマインドセットの持ち方はどうなのか自身で気づくことで、模索から抜け出せるかもしれない。

本書は、なるほど、とポンと膝を叩きたくくなるような記述が満載である。皆さんもぜひ、本書を手にとって、自分の思考の枠は固まっていないか？ワクワク感を忘れかけていないか？と気づきを得て、一緒にクリエイティブマインドを育てていけたら、と思う。原著タイトルは、『Creative Confidence』（ISBN：978-0-385-34936-9）。

（2017年9月19日受付）

細野 繁（正会員） s-hosono@bu.jp.nec.com

NEC サービス事業開発本部 勤務。顧客・パートナー企業から信頼されるサービスの企画・開発・提供に向けてサービスマネジメント標準の開発と普及に取り組んでいる。博士（工学）。